

思文閣出版
4,536円(税込)

新島襄の師友たち —キリスト教界における交流—

本井康博(元大学神学部教授)著

「新島襄交遊録」の第五弾です。昨年春(3月20日)に出した第四弾、『新島襄と明治のキリスト者たち』——横浜・築地・熊本・札幌バンドとの交流(教文館)に続いて、秋(10月1日)に本書を出すことができました。

両書とともに《宗教編》で、それぞれ30人前後の人物を取り上げて、新島襄がキリスト教界でいかなる親交や衝突をしたかを扱いました。両書の違いは、前者では長老派を始めとする他教派の指導者や有力信徒を紹介したのに対し、後者では同志社系とも言うべき自派(会衆派、

組合教会)に所属する指導者や信徒を列挙した点です。ただし、自派のうち、新島の教え子たちは除外しました。

初期の同志社の卒業生や在校生に關して言えば、「熊本バンド」と呼ばれた一群の牧師、信徒たちが圧倒的に著名です。彼らについては、『新島襄と徳富蘇峰(晃洋書房、2002年)や『徳富蘇峰の師友たち(教文館、2013年)ですでに分析を終えています。それ以外の卒業生については、『新島襄の教え子たち(仮題)として、今年から年には一本にまとめるつもりです。

両書が陽の目を見れば、『新島襄と徳富蘇峰』、ならびに『新島襄の交遊(いわば世俗編、思文閣出版、2005年)から始まった『新島襄交遊録』は、6冊構成でひとまず完結いたします。そうなれば、新島の周辺にいた100人前後の人たちとの関わりや彼らの消息、動向はもとより、彼らから見た新島像がより一層鮮明になります。

著者より



教文館
2,700円(税込)

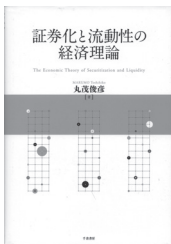
生きるユダヤ教

勝又悦子(大学神学部准教授)他著

同志社大学はキリスト教主義の大学であるが、そのキリスト教の母胎となったユダヤ教は、日本では、まだまだ認知されているとはいえない。本書は、本学神学部でユダヤ教研究、教育に当たる教員が、初学者のために書いたユダヤ教概論書である。だが、単なる概説を超えて、筆者が自ら訳出した口伝トラー、聖書解釈、詩文文学のテキストがふんだんに散りばめられ、時空を超えた様々なユダヤ人の生き様が語られ、さらに筆者らのイスラエルでの生活体験を交えており、どこからでも多様な読み方が可能である。

ユダヤ教徒は、紀元70年にエルサレム第二神殿が崩壊した後、1948年のイスラエル国家誕生まで、様々な国々に寄生し放浪し、迫害され、追放された。自分たちを守ってくれる強大な国家も壮麗な神殿も何もない中、ユダヤ人を守ったのは、まさに、本書が伝える様々な伝承、知恵、文学、詩文等々、それらを生み出す思考力、記憶力であった。カタチあるものは減ってしまう。しかし、文学、記憶、伝承、思考は、カタチがないからこそ、減ばすことはできない。苦難の歴史の中、ユダヤ人たちは、カタチにならないものを抱き所に、常に生きることを選んできた。とかく、即効性のあるもの、効率のよいものばかりもてはやされる昨今であるが、文学、議論、思考にしがみつこうことによって生き抜いたユダヤ人の逞しさ、そしてカタチにならないからこそ誰からも減ばされることがないものの逞しさを伝えたい。

著者より



千倉書房
3,456円(税込)

証券化と流動性の 経済理論

丸茂俊彦(大学商学部教授)著

今から10年前に起きた米国のサブプライムローン問題は、リーマンブラザーズの経営破綻を契機に金融システムを極度に不安定化させ、ほどなく世界経済危機へと発展していく。筆者が金融の研究を始めて四半世紀になるが、金融システムの動揺と实体经济に与える破壊力の大きさについて改めて思い知らされる契機となった。これが本書を執筆することになった動機である。

筆者は、かつて金融取引や銀行の経済機能に関する理論研究を行い、前作『金融取引と銀行組織の経済理論(2009)』を出版した。この本を執筆中にサ

ブプライム金融危機が起きたが、そこで、銀行のビジネスモデルが、従来型の組成保有型から「証券化」を利用した組成販売型へと変貌したため経済主体間で信用リスクの移転が進んだこと、そしてグローバルに拡散した金融危機の原因には経済主体や金融市場を取り巻く「流動性」と大きく関係していることに気付かされた。本書は、証券化と流動性の二つの問題を中心に据えた銀行理論の再構築を試みており、サブプライム金融危機の発生と拡散のメカニズムについてミクロ的基礎付けのある経済モデルによる分析が行われているという特徴がある。

あれから10年、各国政府が行った大規模な金融緩和の結果、ソブリン債などの金融資産にも新たなバブルが起きている。安定した金融システムは国民生活の必要不可欠な社会基盤であり、その健全性の維持と適切な発展に資するためにも、今後も金融システムの制度設計に関する研究を進めていきたいと考えている。

著者より



知泉書館
9,180円(税込)

地獄と煉獄のはざま

石坂尚武(大学文学部教授)著

本書は、著者の西洋中近世心性史研究の一環として、成ったものである。その中核は、14世紀半ば、パッサヴァンティによってトスカナ語で書かれた例話集『真の改悛の鑑』の、本邦初翻訳である。著者が例話に注目したのは、説教の後、俗語で行われる注解から、当時の庶民の心性をうかがうことができるのではないかと考えたからであった。難解なテキストの解説に続くコメントが、本書の約8割の分量を占めるが、このコメント部分にこそ著者の長年にわたる研究のエキスを溢出している。

人口の半分以上を死滅させた14世紀の黒死病の猖獗が当時の人々の心性にとって、いかに決定的な影響を与えたかが、明確に示される。天国に達するまでの一段階であった煉獄のイメージが、現世の過酷化に伴って一変し、鮮烈な却罰のイメージでとらえられるようになったのがその一例である。そして、ここで生み出された「峻厳な神」が、16世紀初頭のルターの宗教改革を生み出す基盤になった、とするのである。著者のコメントは、きわめて多岐にわたる。特にカトリック世界における聖人の「とりなし」についての記述は興味深い。人と神の間に立つて祈願をとりなすといわれる聖人は、コモ大聖堂の例でみるように「聖人のデパート」と呼べるほど多く崇敬されているのであるが、聖母を頂点とするこのような聖人崇拜は、本当の意味でキリスト教が庶民の間に浸透した13世紀に始まり、黒死病の惨禍を経て、以後定着したものであった。佐々木宗雄(大学文学部嘱託講師)



憲法改正とは何か

阿川尚之（大学法学部教授）著

ここ数年、憲法改正の是非が再び議論されている。2015年には、安全保障関連法の制定が違法な解釈改憲にあたるとかについて、活発な論争があった。

改正が一度も行われていない日本とは対照的に、アメリカでは憲法制定以来27の修正条項（Amendments）を制定し、最高裁の判例などを通じて度々実質的改憲も実現してきた。日本国憲法の制定と運用に少なからぬ影響を及ぼしてきたアメリカ憲法の改正史は、改正をめぐる我が国の議論にも示唆を与えるはずだ。担当編集者にそう説得されて執筆したのが、本書である。アメリカ憲法改正の歴史は確かに示唆に富んでいる。既に制



地方自治入門

佐伯彰洋（大学法学部教授）他編著
黒坂則子（大学法学部教授）他著

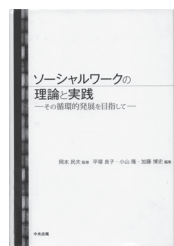
「地方自治は民主主義の教科書」とよく言われる。たとえば、我々市民は、自分達の住んでいる自治体の長を選挙で直接選ぶことができるし、その長が不適任と判断した場合には、一定の要件を満たせば、その長を罷免することができるとリコールという制度が用意されている。このような地方自治についての主要な制度は、地方自治法において定められており、地方自治法を学ぶことは、まさに我々市民にとつて最も身近な地方行政の制度であり方を理解することになる。同志社大学法学部では、このように地方自治法の学習の重要性に鑑みて、約10年前に「地方自治法」の科目が新たに設置され、当初、私自身が担当者になったが、講義のテキストとして使用できる地方自治法を分か

定会議で、改正を許すべきか、許すとすればどのような手続きが望ましいかが議論された。そして憲法草案に改正条項を設け、制定直後、権利章典と呼ばれる最初の改正を実現することによって、制定そのものに反対する人々を納得させた。ただし安易で頻繁な改正が基本法である憲法の正統性と安定性を損なうのを恐れ、それほど簡単にはできない仕組みになっている。

改正は国民の権利であるけれども、簡単には行使できない。護憲と改憲の緊張関係を、アメリカ憲法は最初から織りこみずみである。大統領、議会、最高裁、州政府、国民の間で、時代の変化とともに憲法を変えるべきかどうかの論争が、たびたび起こる。成功例も失敗例もあるものの、そのダイナミズムが国家統治と人権保護に反映される。この国では憲法改正と解釈改憲が、共に機能している。

そんなことを記したこの本が、日本国憲法改正の是非を考えるうえで参考になるかどうかは、読者の判断に任せたい。

著者より



ソーシャルワークの理論と実践

その循環的發展を目指して

岡本民夫（大学名誉教授）監修、

小山隆（大学社会学部教授）他編著、

木原活信（大学社会学部教授）・

空閑浩人（大学社会学部教授）他著

本書の岡本民夫名誉教授の傘寿を記念し、お世話になった者たちと岡本先生の総勢16人で執筆した書である。執筆者全員が同志社福祉にかかわる者たちである。

本書の特徴は、サブタイトルにあるようにソーシャルワークの理論と実践を相互に刺激しながら、循環的に発展していくものであると論じたことにある。医療や教育などの援助専門職に比して、人間の社会生活その

中央法規出版
4,320円（税込）



シークワサーの知恵

津村宏臣（大学文化情報）他編著

「世界」とは、そこに住む住民のホリスティックな生活実態である。地域という「世界」は、現代のグローバル化の波に飲み込まれ、地球上のあらゆる場所まで潰滅し続けている。本書は「世界」の住民と外部者である研究者とが「世界」の今後に危機感を抱きながら実体を共同作業の集大成である。やんばる（沖縄島の北部地域）「世界」が描かれていく。シークワサーやシマンチユなど、シマンチユやシマンチユを纏うコトバやそれらにまつわる生活が「シマンチユ」という島嶼景観や自然と不可分に存在している。主役である住民も「シマンチユ」に熱心と言われる。ここは歴史的には「ヤンパラ」（山原）人という蔑称でも呼ばれた「世界」である。

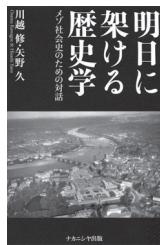
本書は3部12章で構成される。第1部では「シークワサー」「サンゴ」「魚毒植物」「動物」「言語」など生きものを第2部では「自治」「造林」「地名」など暮らしを、第3部では「琉球方言」「方

ものを扱う社会福祉学は、その成果を手術の成功率や教育の学力向上などのような形で数値化して表すことができる。理論と実践の関連が明確になり、傾向にある。そのため、福祉の実践にとつて理論は役に立つのかという問いが常に立ち、一方理論側から見ると実践は日々無定見に行われているとも見える状況にあった。

それに対して本書では、理論と実践を媒介するためにモデルと事例を用い、その相互性を明らかにしようとした。理論モデルを論ずるにあたっては、絶えず実践の事例を意識し、どこまで現実をモデルで説明できるかにこだわり（第2部）、各実践領域の紹介にあたっては既存の理論に照らし合わせながら実践を説明し、さらには実践から得られた知見が経験値として蓄積されるように努めた（第3部）。また、巻末の「座談会」も「お勧め」といえそうである。岡本先生を中心に3人の編者が、数時間（書物中の30ページ）にわたつて自らの私的体験の告白から、理論的議論まで縦横に展開されるさまも興味深いものではないだろうか。

小山隆より

京都大学学術出版会
7,128円（税込）



ナカニシヤ出版
3,456円(税込)

明日に架ける歴史学 —メゾ社会史のための対話

川越修^{かわつちしゅう} 著
大学経済学部教授・他著

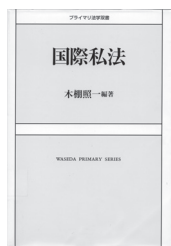
本書は、共にドイツ近現代社会史を研究してきた矢野久さん(慶應義塾大学名誉教授)と私が、2013・2014年の春学期に明治大学政治経済学部において共同で行った講義の記録をまとめたものです。この本を通じて私たちは、これまでの各々の研究の歩みを振り返り(第一部、研究成果をまとめ(第二部)、残された今後の課題を明らかにしています(第三部)。同志社大学や矢野さんの本務校であった慶應義塾大学、その他2人が非常勤講師を務めた大学などで私たちの講義を聴いてくれた皆さんに、その時々必ずしも十分だったとは言えない講

義(今回の明治大学での講義も含め)に対する補講を提供することが本書の狙いです。

私は、経済史関連の学部講義の中でも演習クラスにおいても、自分の研究してきた専門分野について話す機会はありませんでした。ですから私に関したの、こんなことを研究していたのだということをも、卒業生や同僚の皆さんに知ってもらいたいという思いが、本書の執筆を後押ししてくれました。

とは言ってもこの本は、単なる回顧録ではありません。タイトル「明日に架ける」という表現は、私たちの到達点とその限界を明らかにし、これから歴史を学んだり研究したりしようとしている皆さんに、歴史研究の次のステップへの渡河点を示すと共に、私たち自身が今後どこに向けて研究の歩みを進めようとしているのかを率直に語りましょうという思いから生じたものです。メゾ社会史」とは何か？自ら手にとつてその可能性について是非一緒に考えて下さい。

著者より



成文堂
4,212円(税込)

国際私法

林貴美^{はやし たかみ} 著
大学法学部教授・他編著

本書は、大学における国際私法の講義のために書かれたものである。本書の執筆者の多くは、本書編者である木柵照一先生(名古屋学院大学法学部教授・早稲田大学名誉教授)に大学院時代に国際私法の指導を受けた者である。編集会議、その後の原稿を通したやりとりは、大学院生時代に先生の研究室で英語やドイツ語文献と向き合っていた日々を想起させるものであった。執筆にあたり、先生や学兄たちとのやりとりを通して新たな課題を見つげられたことも、非常に有益であった。

私たちの周辺を見渡すと、国

際結婚、国際離婚、国際親子関係などの家族法関係ばかりではなく、国際契約、国際不法行為、国際知的財産権などをめぐる財産法関係でも多くの国境を越えた私人間の法律関係が生じている。国際結婚の破綻に伴う国際的な子の奪い合いに関する問題、外国の代理母から出生した子と依頼者である日本人夫婦と親子関係、外国の通販会社と日本人消費者との契約関係、日本人間の外国における交通事故による損害賠償請求など身近に生じているものだけでも、例を挙げればきりが無い。国際私法は、このような法律関係を規律する最も基本的な法律である。このような法律関係に関する紛争が増加し、その解決が求められており、国際私法を学ぶ必要性はますます高まっている。

読者には、本書でわが国の国際私法についての理解を深め、グローバル化社会にも臆することなく挑んでもらいたい。

著者より



中央経済社
2,592円(税込)

経営管理論

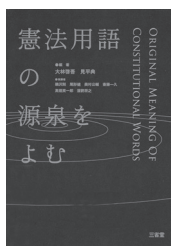
高井紳二^{たかい けんじ} 他編著
大学商学部教授・他編著

中央経済社がベシック・ブラスシリーズとして経済学から経営学の各学問分野にわたって現在、12冊をシリーズで出版しているもので、将来は20冊以上のシリーズで出版を予定されている。本書は関西の主要大学の経営管理論を担当している教員によって書かれており、15回の授業に相当するようになっていく。各大学での経営管理論のベシックなテキストとして利用できるような構成は、経営管理論の全体像、内部組織のマネジメント、外部環境のマネジメント、日本企業のマネジメントの4つの大きな部分に

分かれている。基本的な経営管理理論の内容とともに、最新の管理理論を組み入れ、分かりやすく書かれている。また一人でも深い学習ができるように、ワーキングテーマとして読者が実際に経験できるような課題が設定されている。関連する書物の紹介やさらに勉学を深めたい学生のための学習のテーマや課題図書も紹介されている。従来の経営管理論のテキストとの違いは、経営戦略論やイノベーション論といった現代企業にとって最も重要な管理項目を載せている点である。多くは内部管理の人材や組織に焦点を当てているが、

本書はそれらからさらに多くの分野を組み込んでいる。例えばイノベーション論では発生、管理、事業への展開という3側面で説明しているがこれは現代企業の実践的なイノベーション管理を説明している。経営管理の基礎と応用が学べる本である。

著者より



三省堂
3,456円(税込)

憲法用語の源泉をよむ

尾形健^{おがさわら けん} 他編著
大学法学部教授・他編著

2017年5月、日本国憲法は、施行から70年を迎えます。連合国軍による占領管理体制下で制定されたという特殊な背景を持ちながら、日本国憲法は、その時々状況に応じ、政治・裁判などの舞台で、その意味が様々に問われてきました。最近では、憲法改正や安全保障法制などをめぐり、憲法の意義が社会一般でも問い直されている状況ということができるよう。日本は、近代化の過程で諸外国の法制を摂取し、その際、外来の概念を日本法として導入・

昇華することが求められました。憲法もその例外ではなく、憲法論として語られる事柄の多くは、諸外国で論じられた理念や概念に由来を持つものです。本書は、憲法で用いられる学術的な用語について、比較的若い世代の研究者が、それぞれの研究成果を生かしつつ、解説したものです。本書からは、「憲法」あるいは「憲法典」というものの捉え方も、各国において一様ではないことや、昨今話題となった「立憲主義」という概念も、人類の長い歴史の経験の中で形成されてきたものであると読み取ることができるとおもいます。日本国憲法の改正が現実味を帯びつつあるいま、少し立ち止まって、冷静な思考を得るためにも、憲法の基礎概念を把握しておくことには大きな意味があると思います。本書がそれに貢献できればと願っています。

著者より



中央経済社
3,024円(税込)

京都企業 歴史と空間の産物

酒井絢美(あゆみ) 著
大学商学部助教 他編著

本書では、京都に本社を置いている企業を「京都企業」として、多面的に分析を行っている。具体的には、「古都京都にありながら、イノベーター的な経営戦略によって世界的に存在感を示し続けている京都企業を総合的に分析する」という趣旨のもと、京セラ、日本電産、村田製作所、オムロン、任天堂、宝ホールディングス、ワコールホールディングス、ワタベウエディング、京都銀行の各社について、経営戦略分析、財務分析、独自分析を経て企業価値評価を行い、歴史(経路依存性)と空間(地勢的

特殊性)という2つの視点から、現在の発展の姿を捉えている。

そして、京都以外の企業とは異なる特性を浮き彫りにした上で、最終章においては、京都企業に共通する特殊性を分析している。ただし、類書にあるような文化的・歴史的な視点からのみ現在の成功を直接に説明しようとするものではなく、文化的・精神的な要素も可能な限り経済合理的な要素に還元して説明する努力を行っている点が、本書の特徴である。

本書が、企業の経路依存的・地勢学的分析および経営戦略を含めた多面的な分析を可能にする事例教材として用いられるほか、京都企業の歴史的・空間的に特殊な環境条件への適合の仕方を見ることが参考になれると思う。また、歴史に翻弄され、時には掉さし、地勢学的条件に制約されながらも、力強く成長してきた京都企業の姿を、明日への活力としていただければ幸甚である。

著者より



言視舎
3,024円(税込)

鶴見俊輔

村瀬学(むらせまなむ) 著
(生活科学部特任教授)

鶴見俊輔氏は、1960年代から70年代、マルクス主義が全盛の時代に、マルクス主義ではない形で生きる方法を問うた左派の思想家の一人でした。政党に頼らずに、市民一人一人の目線に世にもの申す運動を展開することを実践し、2015年7月20日、93歳で死去されました。しかし日本には珍しい市民派の偉大な思想家と言われながらも、彼には本格的な伝記や批評はなかなか出ませんでした。彼の書き残した書物、インタビュー、対談集などが膨大だということもありますが、彼の関心を持った分野が、日常性、限界芸術、天皇制、転向、プラグマティズ

ム、ベ平連などと広がり、一望に見渡す視点がかめなかったこともあります。その視点を手に入れるために今回私が注目したのは、彼が後藤新平を祖父とする「貴種」の家系に生まれ、それを負い目に感じつつも、その出自を否定しきれずに苦悩し、自殺未遂をくり返しつつ再出発した思春期でした。その苦渋の思春期の原因に彼の「母」の存在がありました。彼は45歳を過ぎながら猛然とこの「母」を批判し続けることになるのですが、生涯にわたって「死闘」のように続けられた「母」への批判の本当の理由は、いったい何だったのか。私はこの「母」が、「貴種」になろうとする彼を徹底して否定してきた経過を明らかにして、その否定が、彼を「日常派の思想家」に育て上げていった経過を解明していきました。そして、この後藤新平の長女「母」との独特な戦い見つめることで、今まで見えていなかった新しい鶴見俊輔像が見えてきたのではないかと思っています。

著者より



ミネルヴァ書房
3,024円(税込)

「ミ」ろをつなぐ ミュージックセラピー… ことばを超える音との対話

稲田雅美(いなだまみ) 著
(女子大学文学部教授)

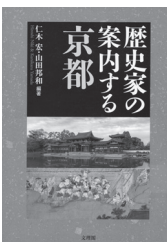
音楽療法に対する社会的認知は近年、大きな広がりを見せています。しかしその理解のされ方はあいまいで、いままなお、病院や施設において何らかのかたちで音楽が導入されれば、その時間は直ちに音楽療法と名づけられ、レクリエーションと変わりのない活動が展開されています。一方で音楽療法士という民間資格により、人的制度が整いつつあるように見えるものの、資格基準を見る限り、準医療領域の一翼を担う力量を備えているとは言い難いものがあります。

このような状況において、本

書は、欧米由来の「ミュージックセラピー(music therapy)」の理論を基盤に、臨床における音楽活動のあり方とセラピストの役割について論じています。なかでも、ミュージックセラピーは既存の楽曲を歌ったり演奏したりするものではなく、セラピーの対象者がセラピストとともに音楽を即興的に奏でていくことに本来の姿があることを強調しています。それはたとえるなら、ナラティブセラピーにおける「言葉による交流」を「音のやりとり」に置き換えたものと言えます。つまりそこでは、セラピストと対象者との、音による相互作用がもつとも重要な要素となるのです。

本書はさらに、ミュージックセラピーを深く理解するには、ただ欧米の概念に習うだけでなく、日本の文化芸術を下支えしている「あそびこころ」を発見することが助けとなることを論じ、音楽療法を「ミュージックセラピー」として展開するに必要な感性を、私たちは潜在的にもっている」と結論づけています。

著者より



文理閣
1,944円(税込)

歴史家の案内する京都

山田邦和(やまだくにひろ) 著
(現代社会学部教授) 他編著

歴史を学ぶための最も良い方法は、その舞台となつた土地を歩いてみることである。また、京都こそは日本の歴史の主要な出来事が最も多くおこってきた都市の一つであろう。つまり、京都の街こそは、他の何にもまして日本史を学ぶ場合の最適のテキストとなるはずなのである。

本書は、私たちのそうした想いの結晶である。本書の執筆に参加していただいた15人の歴史家は、いずれも京都を主たる研究のフィールドとし、京都の史跡に精通している方々である。第一線の歴史家たち、自分の最も得意とする分野について、実際

の京都を案内してもらう。それは、編者の一人である私自身にとつてすら、ワクワクするような知的興奮に満ちた経験なのである。

本書の中には、類書に見られないようなユニークなテーマも忍び込ませておいた。平安時代の検非違使の活動、大文字山の山中に眠る古代・中世の寺院跡、大山崎や清水八幡宮といった京都の周辺都市、近代における豊臣秀吉の顕彰地といった項目は、通俗的な京都の史跡案内には飽き足りないと思っている歴史ファンにも満足してもらえるのではなかろうか。

もちろん、この小さな書物だけで京都の歴史の全てを網羅できているわけではない。むしろ、ひとりでも多くの方々が、京都を歩きながら歴史を学ぶことの面白さをわかっていたら、そのささやかなきつかけを提供することができれば、本書にかかわった私たちにとつてそれ以上の幸福なことではないのである。

著者より